

## 北村山地区の県立高校の具体的な設置計画に係る 「地域説明会」(東根市会場) 記録要旨

1 日 時 平成22年1月27日(水) 19:00~20:40

2 場 所 東根市さくらんぼタントクルセンター

3 出席者

地域の方々 398名

県教育庁 理事、高校改革推進室長、高校教育課長補佐、  
高校改革専門員、高校改革推進室職員

4 内 容 室長より概要説明後、質疑応答

5 質疑応答概要

(質問・意見)

中高一貫教育校の併設型中学校の入学定員は2~3学級で、高校は5学級としているが、高校では、併設型中学校からの入学生と、高校から入学してくる生徒は同じクラス編成にするのか。

(県教育庁)

他県を調査してみると、3つのパターンがあるようだ。

1つは、併設型中学校で高校の学習内容の「先取り学習」をやっており、高校部分で、内進生と外進生を違うクラス編成にしている学校である。2つめは、併設型中学校では「先取り学習」をしないで、体験学習や実験に時間を多くとり、高校部分は内進生と外進生を同じクラス編成にしている学校である。3つめは、高校部分の1年生のみ内進生と外進生を違うクラス編成にして、1年生の時に学習の進度調整をして、2年生から内進生と外進生をいっしょのクラス編成にしている学校がある。

東根中高一貫校(仮称)の場合は、これから設置する教育基本計画策定委員会の中で、検討することになる。

(質問・意見)

今回の北村山地区の県立高校再編整備計画は、当を得た計画である。特に、東根市に中高一貫教育校を設置することを高く評価している。

東根中高一貫校(仮称)は、東根工業高校現有地という説明があったが、中学校と高校の両方ある学校であることを考えると敷地として狭いのではないかと。

また、この中高一貫教育校は高いレベルの進学校にして、山形市内の進学校に比較して引けをとらないような学校にしてもらいたい。

中高一貫教育校をつくるとなれば、相当なお金も必要になることが予想できるが、知事部局との内部調整はどうなっているのか。6年後には開校できるのか。

(県教育庁)

設置場所については、現有地を有効に活用するという考え方でいるが、今後については、いただいた意見のように様々な提案が出る可能性もあり、より慎重に検討する必要があると考えている。アクセスのよさや敷地面積、校舎の規模など様々な視点から検討が必要であるとされており、これからの教育基本計画策定の中で、教育内容とともに詰めていかなければならないこともある。

敷地面積については、高校と中学校の両方ある学校なので、現有地で十分なのかといご意見はごもっともであるが、一方では、併設型の中高一貫教育校であるので、共有スペー

すがどのくらいになるのかも含めて検討が必要である。

学校建設については、知事部局とも十分連携をとりながら進めている。

(県教育庁)

東根中高一貫校（仮称）における進学指導の理念は、例えば、医師を目指す生徒に医学部に入学できる学力をつける、弁護士を目指す生徒に法学部に入学できる学力をつける、そういう学校を目指したいと考えている。

東京大学のような難関大学と呼ばれている大学に何名合格したかということに競うような学校にしたいとは考えていない。

以前、私立の中高一貫教育校を訪問する機会があり、理科の実験室を見せてもらったが、実験室は埃だらけで、実験などは一度もやっていない様子であった。授業も、高校2年生までに、中学校と高校の教育内容を終え、3年生は大学受験のための授業に特化した指導をしていた。大学への合格者数の多さを強調していたが、疑問を感じた。

昨年、京都市のある高校を訪問した。生徒が、課題を解決するための実験方法を考え、実験器具を開発して研究していた。大学生からの支援も受けながら実験を繰り返し、その成果を発表していた。そうしたことをしながら、生徒が学びたい大学に合格していた。

その学校の校長先生から、東京大学のような難関大学と呼ばれている大学に何名合格したかということを目指すよりは、目の前にいる生徒に、将来どのような人間になりたいのか、どんな仕事につきたいのかをじっくり考えさせ、そのためにはどこの大学を目指す必要があるのかを判断できる力をつけることが重要だと伺った。さらに、塾に行かなくても普通の授業で、自分の大学進学の実現できる学校づくりを目指しては、とアドバイスをいただいた。

子どもが将来の自分に夢を抱き、その夢を実現できる学校づくりを進めれば、結果として大学合格に必要な力もつくのではないかと考えている。

(質問・意見)

東根中高一貫校（仮称）は、東根工業高校現有地では狭いのではないかと懸念がある。中学生や高校生は一番活発に活動する時期でもあり、部活動などをしないで勉強ばかりでは、うまく育たないのではないかと考えている。

グラウンドや体育館をしっかり整備して、子どもたちが伸び伸びと活動できる教育環境を整備して欲しい。また、親も子どもたちも、あの学校なら入ってみたいと思うような、すばらしい環境を整備して欲しいので、もっと広い敷地を確保できる新たな場所に設置して欲しい。

駅から近いというのが、楯岡高校の利点でもあったので、北村山地区内の生徒が通学しやすく、駅から近い場所への設置がよいと考える。

(県教育庁)

用地取得に関しては、様々なことに波及するので、具体的なことは申し上げることはできないので、要望として承りたい。体育館やグラウンドについては、教育基本計画の検討の中で精査する必要があると考えている。

(質問・意見)

現有地に建設する場合、更地にして新たに建設するのか。

(県教育庁)

現有地の体育館は、十分使える体育館であると考えている。使える施設は使ってと考えているが、望ましい教育環境の整備の観点から学校全体の設計は考える必要があるので、

教育内容を検討する教育基本計画の策定の中で検討する必要がある。

(質問・意見)

現有地に建設する場合、体育館やグラウンドはどのように整備するのか。

(県教育庁)

都市部の中高一貫教育校は、東根工業高校の敷地より狭い敷地にある学校もあるが、東北地方では、東根工業高校の敷地より広い敷地の学校もある。

ただ、これから設置する中高一貫教育校の教育内容を決めてから、必要な施設や施設建設に必要な敷地面積が決まることになる。なお、体育の授業だけの使用であるならば、高校のグラウンド1つでよいが、部活動のことを考えると、中学校用の体育館やグラウンドのことを考える必要がある。教育基本計画の検討の中で考えていくことになる。

(質問・意見)

この高校再編整備計画は、最初から3校ということに進めてきた事なのか。学校の特色について説明があったが、特色が先にあって3校設置としたのか、最初から3校設置で、各校の特色を後から列挙したのか。

(県教育庁)

北村山地区の検討委員会より3校への再編案を基本とする検討報告をいただき、学校のタイプとして、「地域の産業を担う人材を育成する学校」「進学指導を充実させた学校」「生徒の多様な学びに対応した学校」を示していただいたので、それぞれの学校の実現を図り、実現のための教育の方向性を特色として説明した。

(質問・意見)

楯岡高校の跡地利用はどのように考えているのか。

中高一貫教育校の外国語教育と理数教育の充実という特色に興味を持ち、大変よいことだと感じた。

高校生として感じることは、実践的コミュニケーションの育成を図ることは、大学受験のことを考えると、難しいのではないかと感じている。受験のための英語の勉強にならざるを得ないのが現実としてあるからだ。

授業以外にそのような外国語による実践的コミュニケーション能力を育成する教育プログラムを設けるなど、大学受験に必要な学習と実践的な学習の両立を図ることができるならば、素晴らしいことだと感じるがどのような考え方でいるのか。

(県教育庁)

楯岡高校の跡地利用については、現時点は具体的な計画はないが、これから村山市とも相談しながら、施設の有効活用も含めて検討していきたい。駅から近く、交通の利便性もよいので様々な利活用が考えられるのではないかと。

これから設置する中高一貫教育校は、6年間の系統的な学習が可能であると考えており、現在中学校で高校入試のための学習に当てている時間や高校入学後に中学校の復習に当てている時間を有効に活用できると考えている。例えば、中学校から高校に進む春休みに、海外語学研修をやっている学校も他県にある。

また、じっくり実験に取り組む時間を確保するなど、学ぶ楽しさや知る喜びを実感すること、大学進学に必要な力をつけることの両立を図ることが可能であると考えている。

(質問・意見)

これから設置する教育基本計画策定委員会等には、地域の方や同窓生の意見はどのように反映されていくのか。

(県教育庁)

同窓生の皆さんの意見は、策定委員に当該校の校長もメンバーに入る予定であるので、校長をとおしていただきたいと考えている。また、地元市町村の行政関係者や中学校長の代表の方からも委員を務めていただく予定であるので、その方を通して地域の方々の意見もいただきたいと考えている。

(質問・意見)

東根市にある工業団地の工業製品出荷額は約4,000億円で、県内では第2位の規模の工業団地である。その一端を支えているのは東根工業高校の存在であったと考えている。東根工業団地の衰退にもつながるのではないかと思うので、東根工業高校の入学定員を削減して村山農業高校といっしょにすることについては異論がある。

(県教育庁)

東根工業団地を支えてきたのは、東根工業高校の卒業生の皆さんであると考えている。これからも、村山産業高校（仮称）の卒業生が、東根工業団地を支えていくと期待している。ただ、中学校卒業生数が減少していることから、東根工業高校は、モンゴルとの交流などすばらしい教育をしているが、定員を満たしていない状況もある。さらに、中学校卒業生数が減少すると予想されているので対応が必要である。

一方、東根工業高校の保護者は、普段は東根工業団地で働き、土日は果樹などの農業をしている方も少なくないので、工業高校の生徒に、農業のことも学べる機会を整えることも必要なのではないかという意見をもらっている。

東根市から村山市に工業を学ぶ場が移っても、東根工業団地を支えていくという関係は変わらないと考えている。

生産、加工、流通を1つの学校で学べる環境を整えることにより、柔軟な発想を持った人材を育成できると考えている。

例えば、商業教育で行っているマーケティングでは、どのようなものを作って、どのような方法で売するのか、そしてどのようにしたら利益を確保できるのかということ学んでいる。商業科の専門の先生から工業科の生徒も、その基礎を学ぶ機会が用意されれば、これまでとは違う人材育成が可能になるのではないかと考えている。工業の基礎基本の知識技能をしっかりと学び、さらに他学科の科目も学ぶことにより、学んだ知識技能を活用する力を育成したいと考えている。

(質問・意見)

東根市の農業出荷額は127億円、村山市が74億円、尾花沢市は92億円ということで、工業出荷額の2%程度である。このことから、工業教育をもっと伸ばす方向で考えたほうがよいのではないかと。

(県教育庁)

農業をおろそかにしたら、国は滅びると考えている。この地域の産業の特色は、工業もあり農業もあることである。両方をこれから発展させていく人材を育てていくことが、北村山地区の発展につながると確信している。

(質問・意見)

楯岡高校に学んだことを誇りに思い、母校を愛する1人である。今回の県立高校再編整備計画により、わが母校の長き伝統も、校舎の姿も消されようとしている。北村山地区の中心地で交通の便もよく、教育環境も抜群な場所に燦然と光っていた県立高校が、東根市に、新設校として移ってしまうことは、楯岡高校を卒業した者、楯岡高校を愛した者とし

て、同窓生、学校関係者にとって断腸の思いである。

東根中高一貫校（仮称）と表記されているが、これを目にした方は、楯岡高校の名前も伝統も校風もない新しい学校に決まったものと感じる。例え仮称としても、はっきり決まるまでは、母体となる楯岡高校の何かを感じ取ることができる仮称名にして欲しい。

学校教育を考える場合、教育環境、教育方針、教育指導者、伝統をよく考えて、北村山地区全体のことを考え、市町村ごとの政治、経済、人口動態はあまり考えないで欲しい。

楯岡高校同窓生の汗と涙がしみた楯岡高校の名前と校風を、新しい学校に見える形で継承できないか。楯岡高校の同窓生はなぜ東根市に新しく開校するのか理解できない。

村山市から山形市方面に通学する生徒は、東根市へ通学するのも山形市に通学するのも時間的に変わらないので、山形市の高校へ通学するのではないか。北村山地区の各地から入学してくる中学生の数は限られており、通学に便利で安全な土地に学校を設置しなければ、楯岡高校現有地よりも学校運営が難しくなるのではないか。

まだ、計画を変更できるのであれば、卒業生の声を聞いていただける時間はあるのか。同窓会の支援をどのように考えているのか。

（県教育庁）

同窓生の皆さんの母校への思いは、よく理解しているつもりだ。楯岡高校、東根工業高校、村山農業高校の同窓会の皆さんは、それぞれの学校を今のまま残して欲しいと考えていると思う。あるいは、北村山高校の同窓生の皆さんも北村山高校をもっとよい学校にして欲しいと考えていると思う。

そうした、北村山地区の各高校を卒業した皆さんの学校に対する思いが、北村山地区の各高校を育ててくれたと考えている。

ただ、中学校卒業生数が減少してしまい、各高校は対応が必要になっている。現在のままでいけば、各校は1～2学級の小規模校になってしまい、教育環境の確保が難しくなってしまうことを理解して欲しい。

東根中高一貫教育校（仮称）は、楯岡高校を母体として設置し、村山産業高校（仮称）は村山農業高校と東根工業高校を母体として設置する。

楯岡高校、村山農業高校、東根工業高校は、それぞれ歴史と伝統があり、今まで特色ある教育に取り組んできており、地域の内外に有為な人材を輩出してきた。それはほかでもなく、社会の変化や要請に対応した教育を積み重ね、不易の教育理念も大切にしてきた賜物と考えている。現在学んでいる在校生はもとより、これから入学してくる生徒たちに、これまでのよりよき教育理念を踏まえて、新しい学校づくりを進めていきたいという考えから、母体とすると表現している。楯岡高校のよりよき伝統は新しい学校に引き継がれると考えている。

学校の名称については、仮称であり、そのまま校名になるとは考えていない。校名については、これまでの新設高校においては公募して正式な校名の決定に至っている。具体的には、開校準備の委員会等で決定方法を決めて進めてまいりたい。

同窓会のあり方については、現在進めている酒田新高校（仮称）の場合は、同窓会同士が集まって、どのように酒田新高校（仮称）を支援していくのか、同窓会運営をどうしていくのか話し合っ決めていく。同窓会は独立した組織であるので、同窓会同士で話し合うことが基本になると考えており、各高校をこれからも支援していただければ幸いと考えている。

卒業後の証明書等の発行については、きちんとわかるように示していきたい。

(質問・意見)

北村山地区の県立高校再編整備計画への教育庁の皆さんの情熱を感じている。一日も早く実現して欲しいと考えているが、具体的なスケジュールを教えて欲しい。

(県教育庁)

一般的に、新しい高校をつくる場合は、教育基本計画と敷地利活用計画に2年、ハード面では、校舎の設計に2年、建設に2年、あわせて6年にかかるといわれている。現在進めている酒田新高校（仮称）は、平成17年3月に公表し、平成24年の4月に開校する予定なので、7年かかる予定だ。北村山地区の新しい高校に関しては、通常で考えれば6年かかるが、できるだけ早く開校できるよう全力で努力する。